

大高 博美
関西学院大学

日本語のリズムからみた促音の本質

The Rhythmic Substance of Geminate Consonants in Japanese

本研究の目的は、日本語の促音を従来とは違った観点、すなわちリズムの観点から考察し、その本質が音楽理論でいうところの「休止」(意図的に計られた無音区間)に相当することを主張することにある。よって日本語は、リズム単位のひとつに休止をもつ、世界的に見てもユニークな言語ということになる。要するに、日本語の促音(Q)は、音韻的には1モーラ分の長さを帯びた休止の概念(ゼロ音素)で、2モーラ分の長さを帯びた音節(CVQ)の第2要素としてのみ存在でき、音声的には後続子音からの逆行同化により物理音に具現されるのである。(なお、休止が存在するためには必ず前後に何らかの音が必要なので、(C)VQという音節は単独では存在できないという点にも注意されたい。)

日本語における基本リズム単位は、大きく分けると「長」と「短」の2種類に分類できる。モーラ数で表わせば、前者は2モーラ、後者は1モーラである。あるいは音楽記号を用いて「短」を仮に八分音符で表わせば、「長」は四分音符で表わし得る。しかし「長」の単位音は、生成される際に「短」が付加的に2倍されてできるわけではない。単位的には初めから「長」として(つまり「短」と対立して)存在しているので、「長」として具現された音節を音声分析機で計って2等分してみても、「短」と同等とはならない。これは音楽における音符の音価具現においても同様である。(ビート単位と拍子)

上述の2種のリズム単位を下位分類すると、「長」には(C)VR, (C)VN, (C)VQの3種が、そして「短」には(C)Vの音連続(音節)が相当する。ここで誰でも抱く疑問は、2モーラを帯びる(C)VNと(C)VQでは、生成の際、前部の自立モーラと後続の付随モーラの長さがどのように計られるのかという点であろう。基本的には、全体が前部((C)V)と後部(N, Q)に折半されると言えるのだが、ここで重要なことは、それが「付加的(additive)」ではなく「拍節的(divisive)」なメカニズムでなされるということである。換言すると、拍節的リズムでは前部((C)V)に下拍が来て、後部(N, Q)に上拍が来るということであるが、要は、この時間測量メカニズムでは前部と後部の長さが不均一になりやすいという点が重要なのである。実際に、日本語話者被験者10人に拍節的リズム感を養ってもらった上で、音連続|ター|タタ|タ ㄱ|タタ|ター| (「ター」は長音、「タ」は短音、「ㄱ」は休符、「|」は小節線を表わす)と発音してもらったところ、「タタ」と「タ ㄱ」において下拍部は上拍部よりも有意に短かったのである。さらに、休止に後続される「タ」はそうでない「タ」よりも少々長くなることも分かった。この結果は、例えば「ばっと」の第1母音「ア」が第2母音「オ」よりも長くなるという先行促音研究の結果報告と一致する。

促音の本質が休止であることを支持する音声現象は上述のもの以外にもある。例えば、イタリア語の2重子音では、それが同一単語内に2度現れる場合、OCPにより決して同じ子音が2回出現することはないが(例: *ingannerebbero* 'will betray', *videocassette* 'videocassette', *bellezza* 'beauty', *cosiddetto* 'as it were'), 日本語の促音の場合そうではない。「赤血球」([sekkekkyuu])、「白血球」([hakkekkyuu])、「一角鬼」([ikkakki])、「おっこっちゃった」のように、同一単語内に同じ子音が複数回現れうるのである。この事実は、日本語における促音が *melody tier* の上で規定された単位ではない可能性が高いことを意味している。結論として促音は、*timing tier* 上で規定された音韻と言えよう。

参考文献

- Aizawa, Y. (1981) "Intensification by so-called 'Choked Sound'- Long consonants-in Japanese," *Onsei no Kenkyu* 21, 313-325.
- Esposito, A., and M. G. Di Benedetto (1999) "Acoustical and perceptual study of germination in Italian stops," *Journal of the Acoustical Society of America* 106, 2051-2062.
- Han, M. (1962) "The feature of duration in Japanese," *Onsei Kenkyu* 10, 65-80.
- Homma, Y. (1981) "Durational relationship between Japanese stops and vowels," *Journal of Phonetics* 9, 273-281.
- 川越いつえ(1995)「借用語にみる促音化とリズム衝突」『言語研究』108, 46-73.
- (1996)「音節かフットか」『音韻研究』開拓社出版, 67-70.
- Kubozono, H. (1989) "The mora and syllable structure in Japanese: evidence from speech errors," *Language and Speech* 32: 3, 249-278.
- (1995)『語形成と音韻構造』くろしお出版
- (1998)『音声学・音韻論』くろしお出版
- 窪園晴夫・本間猛(1998)『音韻構造とアクセント』研究社出版
- (2002)『音節とモーラ』研究社出版
- Otaka H. (2009) *Phonetics and Phonology of Moras, Feet and Geminate Consonants in Japanese*, University Press of America.
- Pickett, J. M., and L. R. Decker (1960) "Time factors in perception of a double consonants," *Lang. Speech* 3, 11-17.
- Port, R., S. Al-Ani, and S. Maeda (1980) "Temporal compensation and universal phonetics," *Phonetica* 37, 235-252.
- Rochet, L. B., and L. P. Rochet (1995) "The perception of the single-geminate consonant contrast by native speakers of Italian and Anglophones," *Proc. ICPHS95* 4, 132-135.
- Sachs, C. (1953) *Rhythm and Tempo: A Study of Music History*, New York: W. W. Norton.
- Sato, Y. (1993) "The duration of syllable-final nasals and the mora hypothesis in Japanese," *Phonetica* 50, 44-67.
- Toda, T. (1996) "Interlanguage Phonology: Acquisition of timing control and perceptual categorization of durational contrast in Japanese," Unpublished PhD dissertation, Australian National University.
- Tsurutani, C. (2001) "Acquisition of word prosody by second language learners: a study of the acquisition of Japanese prosodic features by English learners," PhD dissertation, University of Queensland,